県外事例調査

大阪

ミュージアムと利用者の協働の先行事例の調査に訪れた大阪。

都市の中に驚くほど広大な面積を持つ長居公園の一角に、大阪市立自然史博物館はあります。同館を拠点に活動するサークル「なにわホネホネ団」の団長の西澤さんと、同館の学芸員であり「なにわホネホネ団」の事務局長である和田さんにお話しをお聞きしました。

戦後まもなくの設立から市民に支えられた大阪市立自然史博物館は、うらやましいぐらい自由で対等な関係性で、サークル活動などを行う利用者と館の職員が事業を実施していました。

「ここでこれがやりたい」という利用者の思いが形になり、いくつものサークル活動が楽しく元気に活動。その中でも出色のサークル「なにわホネホネ団」の抜群の発想と行動力は、団長の個性に依るところが大きいとか。東日本大震災時には、遠く大阪から被災地にかけつけ、被災ミュージアムの支援やワークショップなども行ってきました。

「暴れ馬のようなこの人が、自分の信念に基づいて動いてくれることで、学芸員だけではできなかったこともできた。東北に自分たちを連れて行ってくれたのはこの人」（和田さん）、「こういうことをやりたいと相談して邪魔されたり止られたことがない」（西澤さん）と言うお二人。その言葉の背後にある信頼関係のゆるぎなさが、潔いほどでした。

ミュージアムにおける協働が言われはじめるかなり前から積み重ねられた「真の協働」。信頼関係は間違いなくその成果の表れなのだと思います。

【その1】

日　　時　：2019年12月6日（金）　10：30～16：00
リサーチ先　：大阪市立自然史博物館

お話しをお聞きした人　：西澤真樹子氏（なにわホネホネ団団長／認定NPO法人大阪自然史センター職員）
和田岳氏（大阪市自然史博物館主任学芸員／なにわホネホネ団事務局長）

調　査　者　：岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員・専務理事／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）
川延安直（福島県立博物館学芸課長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）
小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

PF-P40

県外事例調査

長野阿智

ミュージアムと利用者の協働の先行事例を学びに長野県阿智村へ。

２０１３年に開館した満蒙開拓平和記念館にお邪魔して館長の寺沢さん、事務局の島崎さん、同館のボランティア団体であるピースＬａｂｏ．の木村さんからお話しを伺いました。

マイナスの歴史でもある満蒙開拓を扱うことの難しさ、しかし、それを伝えることの意義。開館、そして運営に関わる多くの人の思い。

寺沢館長の、「この場があり、拠点となることで、動いていくことがある」というお話しは、命あるハコだからこその言葉でした。

ハコは単なるハコにもなってしまうし、誰かの思いの受け皿にも、自己実現の場にも交流の場にもなり得る。

「利用者のための場である」という言葉だけは当たり前になっているけれど、まだまだ実現が難しいミュージアムのあり方を実践している館でした。

日　　時　：2019年12月7日（土）　13：00～16：00
リサーチ先　：満蒙開拓平和記念館
お話しをお聞きした人：寺沢秀文氏（満蒙開拓平和記念館長）
島崎友美氏（満蒙開拓平和記念館事務局）
木村佳稔氏（満蒙開拓平和記念館　ボランティアグループピースLabo. メンバー）

調　査　者　：岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）
川延安直（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）
小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

県外事例調査

長野阿智

川延安直
フォーラムへのご参加をお願いしているところは、福島県立博物館も含めて一般的な公立のミュージアムではなく完全な民間でもない、官と民が非常にバランス良くうまくいっている館を選ばせていただきました。
八戸市のケースはいきなり行政が作るのではなく、まずどういうニーズがあるかを探り、市民の活動を振興しようと動いている。その中から理想的な箱が立ち上がっていく。もう一つ、昨日は大阪市立自然史博物館におじゃましました。あちらは歴史があって、戦後の市民活動の中から立ち上がってきたということをお聞きしました。非常に開かれた運営です。さまざまなサークル活動をかなり自由に受け入れて、いろいろ市民の方たちの活動を博物館が支援するというよりも、むしろ協働している。同じ研究者としての目線に立って館を利用していただくことを滑らかな形でなさっておられました。文化施設を地域で生かしていくという意味ではとても素晴らしい理想的な例として拝見してきました。
こちらの館はある程度村のご理解もあって公的資金も入っているようですが、やはりみなさまの頑張りと熱意がすごい。ここまで立ち上げられて、なおかつ、今日もお客さんがこうしてたくさん来られている。高校生ボランティアも本当にうらやましいです。活動体として素晴らしいと拝見しておりました。その辺りを勉強したいと思っております。

寺沢秀文
ありがとうございます。お話をうかがって、ご期待に応えられるかどうか心もとない。実際に見ていただきそんな活動なのだと受け止めていただけたと思いますが実際には苦心もあります。この記念館がちょっと独自な立ち位置、スタンスであるのは間違ないと思いますが、正直なところこの記念館はずいぶん作るのに紆余曲折があった。やはり満蒙開拓の歴史が戦後語られなかった。向き合うことが難しい歴史だった。あまり振り返りたくないと思われる歴史であったということがある。

目を背ける者は再び同じ過ちを繰り返す

とは言いつつも私どもの考えの基本は、そういった大きな犠牲を出した歴史、それが不都合なこと、向き合いにくい歴史だったとしても、そこから目を背ける者は再び同じ過ちを繰り返す。それが歴史だというのが私どもの思いです。確かに向き合うことはつらく大変なことですけれど、やはりそこに向き合うことが二度と同じような犠牲を出さないために必要であるというのが私どもの基本的立場です。

結果として民でやらざるを得ない

ただ、それを言ったときに先ほど官か民かという話があったのですが、実際には抵抗があります。満蒙開拓の歴史も見ていただいたとおり国策で行なわれた歴史でもある。本当だったらこういったものも公立、官立で作っていただいたほうがいいと構想開始当時は思いましたけれど、正直言ってかなり抵抗がありまして、結果として民でやらざるを得ない中で、民間で立ち上げて、４年目ぐらいまでやってきてようやく「そこまで民間がやっているなら」ということで官からの手が差し伸べられ、建設の補助もいただけるようになったのです。でも建設の補助はするけれど作った後は自分たちでやっていけよということ。今も入館料とご寄付だけが頼りの運営をしているのがこの記念館の実情です。

官民関係なく地域をあげて

官、民という対立構造を作るのではなく、満蒙開拓も官民関係なく地域をあげてみんなで語り継いでいくべき歴史であるということが大前提。たまたま今民間の我々が担っているだけであって、行政も一緒にやっていただけることが望ましいということは再三声をあげています。先ほど見ていただいたセミナー棟は８千万から９千万ぐらいかかっています。正直当初は行政からの支援なしでやろうと思っていたのですが、ありがたいことに「そこまで民間でやっているなら」とご支援をいただいた。

民間でやっていくことの難しさ

ただ、最近ちょっと流れが変わってきた。私どもは民間で大変経営が苦しいですが、民間の良さは大変でも自由な立場であるということ。例えば「ピースおおさか」みたいなことがなくてずっとやって来られています。本当に市民の手作りの資料館で自由にやらせてもらってきていますが、今回セミナー棟を作るときにやっぱりいくらか行政の思惑が出てきている。自主性を持って民間でやっていくことの難しさはここに来て感じながらの運営であります。小さいながらもなんとかやっているのがこの記念館です。果たして、みなさん方の企画に私どもとしてお役に立てるかどうか心もとないところがありますが。

小林めぐみ
民間のみなさんで運営なさっているからこそ、いろいろな方たちの支援や思いが寄せられているのではないでしょうか。どうでしょう。

市民目線で

寺沢
そうですね。この場所は同じ市民目線で展示も作り、説明もし、運営もしていくということが基本だと思っています。こういった歴史関係、平和資料館関係はどうしても専門的過ぎてなかなか足が運べなくなってしまうこともなきにしもあらずだと思います。そういった意味でなるべくわかりやすく同じ市民目線で説明を行うと同時にここからの発信自体も、もちろん平和に対する思いはありますけれど、強く押し付けるのではなく、どういったことがあったかという客観的な事実とか証言をお伝えする。そこから何を受け止め、何を感じるかは来館者ご自身がお決めになることで、我々はそれにあまり関係せず、押し付けることはしないようにやってきています。多分そういったことが比較的受け入れていただけて、こんなへんぴな場所で満蒙開拓というマイナーなテーマでも、ある程度の人に遠くからお越しいただいているのだと思います。

今日もお菓子をいただきました

島崎友美
事務局の島崎と申します。ここにどんな方が来るか見ていると、学校の生徒さん、個人の方で満州におじいさんやお父さんが行っていたらしく、その足跡をたどりに来たというゆかりの方、「ちょっと歴史に興味がある」と来られる方、

同級会だとか、ちょっと一杯やって、近くに昼神温泉がありますので、宴会をしてから寄ってみたとかそういう感じ。美術館はちょっとハイソな感じの人も来ると思うのですが、ここは地元のおじさんが長靴をはいて来るみたいな感じもありました。今日もお菓子をいただきました。個人で来る方も団体の方も「つまらないものですが」って菓子折りを持ってきてくれる。事務局はお菓子があふれています。普通美術館とか博物館に行くときに持っていかないよね、不思議だねって話をしています。

小林
親近感があるのですね。きっと。

人が集まらなければ意味がない

寺沢
お菓子だけじゃなくて採れた果物やお芋とかとうもろこしとか季節のものを持ってきてくれます。どうしてもこうした施設、記念館は「箱物」というイメージが持たれる。「箱物」にはしたくないとずっと思っていて、「箱」も大事ですけど、そこに人が集まらなければ意味がない。満蒙開拓という一つの切り口が中心ですけれど、それだけではなく人の交錯する場所、交流の場になっている。たまたま私や島崎は肉親に開拓団員がいたのでここに参加していますけど、今日ここで活動されているみなさん、他の職員たちはまったく満蒙開拓と関係ない職員が多いです。ボランティアの人もそうです。そういった意味では満蒙開拓という切り口ではありますけれど、さまざまな人が平和やそういったことへの思いを共通項として持って集まってきている場所、人が交錯する場所だとあらためて思います。場所がないと集まりませんから、拠点としての場所はやっぱり大事だと作ってみて思いました。

小林
まさに拠点ですね。阿智のみなさんがこの施設自体に親近感がおありだったりするのでしょうか。

島崎
阿智村というかこの飯田、下飯田にはゆかりの方もいらっしゃる。ただ、ここで働いているボランティアさんは県外の人たちも多くて、阿智の地元の方でボランティアに関わる人はむしろ少ない感じです。

ここでこそできた記念館

寺沢
ここの立地が問題です。こんなへんぴなところというのはあります。さらに記念館が出来た背景として、いろいろきさつがあるにしても全国で一番多くの開拓団を送り出したのがこの地域であるということがやっぱりバックボーンにある。多かっただけにいろいろな問題もあって、送り出した側の人を責める、あまり話したくない、触れたくないという方もいっぱいいる。同時に、「二度とそういうことは繰り返したくないから、そういうことを繰り返さないために私の話が役に立てるなら」と言って、当時のつらい体験、中には集団自決の中で生き残った方、集団自決に手を下した方、そういった方までもが語り部としてお話をしてくださっている。そういった方々がこの地域だからこそ身近におられて、そういった方々の思いがあるからやっぱりこの場所なのだと思います。そういう面ではここでこそできた記念館であり、たぶん満蒙開拓をテーマに限った場合には、ここではなく仮に大都会、都市部であったとしても運営は厳しいという気がします。

岡村幸宣
遠さゆえの自由さもあります。うちもそうです。官が入っているかどうかということと、遠さゆえの自由さもある。利便性があればいいとは必ずしも言えないと思います。

小林
ここに足を運ぶことが一つのアクションですね。気軽じゃないからこそ行こうと思う心の動き。

つらい歴史だけど笑顔がある記念館でありたい

寺沢
満蒙開拓は戦後のみなさん、あれだけ多くの人が関わった歴史なのに、戦後は教科書でも学校の授業でも触れられてこなかった。でも、その中に学ぶべき教訓が多く含まれている歴史だということは間違いないと思っています。そういう中でみなさんがここに足を運びやすいように、「あそこはあまり行きたくない」とか、「行きにくい」ということにしないようにしたいと思います。館の建物もなるべく明るい、光をたくさん取り込む構造にした。どちらかと言えば暗い重いイメージの満蒙開拓ですけど施設的にも明るくする。うちのスタッフは女性の方が多いのですけど、やっぱり明るい雰囲気や笑顔も大切。テーマは戦争とかつらい歴史だけど笑顔がある記念館でありたいです。

加害の面があったことにも

戦争のことを語るとなるとどうしても被害が前面に出てきます。こんなひどい目にあったとか、こんなひどいことが二度とあってはいけないということが多い。そうじゃなくて、それだけではなくて、加害の面があったことにも向き合っていかないといけないということで加害も取り上げています。でもあまり加害ばかり前面に出すとみなさん足を運びにくくなるかと思う。あまり加害を強調するのではなく、とにかく来ていただきやすい状況を作って、来ていただき一緒に回ってみていただいて、その中で「加害という面もあったのだな」ということがわかっていただけるような、そんな組み立てにしたいとみなさんにもガイドをお願いし発信にも気をつけてはいます。

小林
木材を多用されているのが建物の雰囲気をすごく柔らかくしている気がします。

寺沢
そういった館全体の雰囲気というかもたらすものが大事だと思う。設計してもらったのは地元の設計士ですけれど、まだ記念館が出来るかどうかもわからない頃に10日間ぐらい自腹で私と一緒に旧満州に旅行をしてもらって満州のイメージも雰囲気もつかんでもらって、木で造ってもらったのが大きかったです。

小林
島崎さんは開館からいらっしゃるのですか。

おじいさんが義勇軍で満州に

島崎
そうです。開館の 2013年から。地元が満蒙開拓団を送り出した村で、おじいさんが義勇軍で満州に出ました。中学とかその頃にちらっと話を聞いたぐらいでそんなに興味はなかったです。大学に行って授業で学んでいく中で、自分の村にもこういう歴史があったということにふと思い至った。でも、ほとんど知らない。これはなんだか恥ずかしいことかなと考えてこちらへ。本当は大学時代英語が専攻だった。そこからガーンと舵を切りました。こっちの満蒙開拓、地元のほうに戻ってきちゃった感じです。学生時代に二応修士まで出て満蒙開拓のことを勉強してから戻ってきました。

小林
おうちではあまりおじいさんはお話しなさらなかったのですね。

島崎
そうですね。ちょっとお酒が入ったりしたときにたまに中国語でペラペラって話したりしたことはありました。でも、それくらいで、ちゃんとした聞き取りもその頃は自分もまだ興味もなかったのでしなかった。この仕事についてから、やっと二回聞き取りしました。

小林
そうですか。話してくださいましたか。

島崎
そうですね。でも、自分からしゃべるというよりは、聞いたことに答えるという感じ。結局、その一回聞き取りをしただけで 3年前に亡くなっちゃったものですから、「しまった。もっと聞いておくのだった」と後になって思いました。

小林
目を閉じたいことだからこその難しさがあって、文章にするにもこの時間の経過が必要だったと館長が書いていらっしゃいました。島崎さんから見てもこの数十年間は必要な時間ですか。近いと難しい問題だったのでしょうか。

体験者でないということに縛られなくても

島崎
やはりそうだと思います。すぐには話せない、まだ生きている人がいるから話せないとかいうのもあると思います。10年、20年、30年経って、今は70代ですけど、本当に話せるのは子ども世代だった人たちなので、直接いろいろ知っているわけではないと思います。子どもの時の体験だけれども語り部として自分の体験を話すときに、聞いてくれるのがだんだん学生さんや若い世代になるとすると、そのとき、自分が子どもだったときのことを話すと、年が近くてより身近に感じられる。自分も実際体験していないですけど、体験していないからこそわかる、ちょっと離れているから見える、そういうことがあるのではないかと思っています。だから、体験者である体験者でないということに縛られなくても伝えていけることがきっとある。

小林
体験者問題では丸木ご夫妻のことを思い出してしまいます。

岡村
そうですね。当事者性はどこでも重要。生きていても体験者は語れないということがありますよね。

島崎
ここでも語り部さんは今7、8人ぐらいです。第2土曜日に定期講演をずっとやっています。最初のうちは20人ぐらいでしたが、今は実質動ける人が限られて7、8人ぐらい。

小林
それはご高齢になってということですか。

島崎
そうです。亡くなった方もいます。話せるけれどもここへ出てくることができない方も、自分で運転して来られる人もいますが、そうじゃなくてお迎えに行かなきゃいけないとするとボランティアさんが必要になる。なかなか切り盛りが難しくなっている。

岡村
高校生のボランティアはどういうきっかけですか。

島崎
2、3年前全国の高校生が集まる総合文化祭が長野県で開催されて、「この地域の歴史を全国の高校生たちに伝えよう」という取り組みをここのボランティア部の顧問の先生、熱心な松川高校というところの先生から、そういうことをしようという話がこちらへ来たものですから「それはぜひ」と。何回かここへ来て勉強して、今は2代目、3代目ぐらいの方たちが続けてやってきてくれています。月に一回くらいここへ来てお話ししてくれて、慰霊祭で誓いの言葉を読んでもらっています。そういう形で若いみなさんに関わってもらうことをしています。

小林
お話ししてくれる内容は研修でみなさんから教えてもらうのですか、自分で調べることもありますか。

近現代史を学ぶ機会が日本人は少ない

寺沢
冬の間にボランティア養成講座を開館以来やっています。今年も受けてもらっていますし、彼ら自身も自分たちで勉強しています。この地域はさっき言ったように全国で一番多くの開拓団を送り出した地域でもあるので、学校の特別授業を設け、ここに来て少しずつ勉強されています。歴史を知るという意味ではまだまだこれからと思うので、これからまだ知ってもらうこと、働きかけていくことが多い。「伸び代」が大きいと思っております。特に若い人たちにこういった歴史を知ってもらいたいと思う。いつも私は講演会で話をするのですが、アジアの青年たちに比べると近現代史を学ぶ機会が日本人は少ないです。向こうは知りすぎるほど近現代史を教え込まれています。残念ながら日本のあまり近現代史を学ぶことのない青年たちとの接点があったときに軋轢、トラブルが生じることもある。日本人としてこれから海外に出て行くについては、もちろん

日本の良さもしっかり学んでほしいですが、同時に日本という国がアジアで100年、150年の間どのように過ごしてきたかもしっかり知った上で出て行って欲しい。その一つのきっかけが身近なテーマである満蒙開拓。戦争には大きな被害、悲しみが、ひめゆりにしても原爆にしてもありますが、この地域にも満蒙開拓という戦争の中で生み出された歴史があって、多くの犠牲が出ており、その犠牲も自分たちの犠牲だけではなく、残念だけど相手方の国にも悲しみを与えているということも含めて学んでもらえる機会になればいいと思います。

小林
大事です。教育は怖いと思う。何を大人が渡しているかで変わってきます。話が変わってしまうのですが、館長さんたちが記念館を作ろうと考えられた一番の原動力は何だったのでしょうか。大変なご苦労もされてきたと思うのですが。

知った者の責任として

寺沢
この歴史を埋もれさせてはいけないということが一つ。たまたま私も島崎も肉親にそういう者がいるということはあるにしても、何かをきっかけにある事実を知ったとしたら、事実を知った者の責任として次の人に伝えていく、それがすべきことだろうという思いがあります。特にこの地域はさっき言ったように全国で一番多くの開拓団を送り出した。けれどこういう歴史を残念ながら多くの人が知らない。それがなぜなのかも含め、押し付けではなく、知ってもらえる場としての記念館があるべきだろう、あったほうがいいだろうと。
この記念館の母体になったのは飯田日中友好協会という団体です。飯田日中友好協会ができた経過は、この近くにあった平岡ダムで戦争中に中国人の強制連行があった。私は花岡記念館（秋田県）にも行ってきましたが、同じようなことがここにもあって多くの中国人犠牲者が出ています。戦後、中国にたくさんの日本人残留孤児が残されていることがわかって、子どもたちを返してという話が出た時、「その前にまずやることがあるだろう」と言われた。日本に連行されて亡くなった犠牲者の遺骨を拾って送り返す。それが慰霊し慰霊碑を作って中国に遺骨を返すという活動を始めるために作られたのが日中友好協会のはじまりです。そういった経過を背負っていますので、友好協会の活動の多くは中国に残された残留孤児のみなさんが帰国者として帰ってくる、その方々の受け入れが活動の中心でした。私ども身元引受人になって帰ってきた方のお世話をしている中でだんだんとわかってきたのは、たくさんの残留孤児が残されていて、その人たちの多くを開拓団の子女、子弟が占めるということがわかってきました。当時200万人以上の日本人が旧満州にいて、開拓団はそのうちの27万人ですから1割強ぐらい、なのに、なぜ残留孤児のほとんどが開拓団の子どもたちなのだろうか。知りたいと思っていろいろ調べてみたら全国どこにも満蒙開拓に特化した記念館はない。だとしたら、なぜ満蒙開拓が送り込まれて行ったのかを知り伝えていく施設が必要。そういった流れの中で満蒙開拓平和記念館を作ろうという話になっていきました。

小林
館長さんの周りに同じような考えの方、共感される方の動きもあったのでしょうか。

変わり者と見られていた

寺沢
もちろん、その方々が活動の中心になっていますが、残念ながらそういった方々の数は限られています。正直言って最初の頃には、本当にそういったことをやっている人たちが珍しいし、どちらかと言えば変わり者と見られていた時代のほうが長かった。ですから、今はこんな記念館ができて、来ていただけるのは本当に隔世の感があります。
やはりその素地はあったと思うのです。この地域には肉親、近い人に開拓団員や向こうで亡くなった方が多くいらっしゃった。それをどこかに抱え、もっと詳しく知りたいと思いながらも学ぶ場所がない。体験者の方々も話そうとされる方は少なかった。というのはやはり現地でたくさんの犠牲、集団自決とかいろいろな思いをしている方々にとってはあまり話したくないということもあった。本人たちは侵略に加担するつもりで行ったわけじゃないですが、戦争が終わってみれば、結果としては侵略に加担していたということがだんだんわかってくる。そうすると、日本に生きて帰ってきてからもあまり子や孫に話すことが少ない歴史だったと思います。

ここに来たら昔のことを話してくれた

関係者のみなさんの中にもやもやするものがいっぱいあっても、そういうことを学ぶ場所、交流する場所がなかった。この記念館ができたことでそういった方々がここに来て、振り返る中で満蒙開拓って何だったのだろうということを開拓団のご自身もようやくこの時期になってわかってくる。あるいは、家族そろってここに来て、おじいちゃんが昔のことを話し出してくれる。そんなこと家で話すことはなかったのに、ここに来たら昔のことを話してくれた。そういった面でいろいろなことのきっかけになる場所になれた。

小林
目に見えるこういう場ができることの効果。それまでは「触れてくれるな」という思いがあった人も反転していったかもしれない。

島崎
村の開拓団の戦後の集まりで、なんとか会とかあって、そういう集まりの場ではみなさん同じ経験を持っているから共有ができたと思いますがそれくらいですかね。場所がなければ広がっていかない感じ。

蓋をするのではなく

寺沢
むしろ、あまり触れたくない。特に開拓団を送り出した行政側としては。貧しい村から満州に行けば豊かな生活が待っているという思いがあった。でも、その前に国策としては満州防衛の一端を担わせるという目的を持っていた。行ってみたらそこには家も畑もあって、それは元々中国人たちのもので、中国人たちが本当は日本人のことを恨んでいるということを知らずして渡って行った。結果として最後には多くの犠牲を出させてしまった国策の誤り、これに加担してしまった行政としてはあまり振り返りたくない。この記念館を作る時もある首長さん、村長さんから「あまり当時の行政を責めてくれるな」ということをはっきり言われました。確かにおっしゃるとおりで、戦後生まれの私たちが当時のことを言える立場じゃない。けれども、これだけ多くの犠牲を出した歴史に対して「当時だから仕方なかった」で蓋をするのではなく、なぜそういうことが起きてしまったのか、道筋をたどって、そこから同じ犠牲者を出さないようにしていくことが今の世に生きる私たちの務めだとあらためて思います。そういったことをわかってくださる行政の方もいっぱいいらっしゃって、そういった方々から声が出て、記念館を支援してあげようという流れになっていると思うので、最後にはやっぱりちゃんとわかっておられる方がいるのだなという思いでやっています。

小林
お話をお聞きしていて分断、対立が生まれる言葉を館長さんはおっしゃらないんです。いろいろな考え方に対してフラットな目線で、判断するのはみなさんですというスタンスが伝わる。

川延
公立館はミッションが弱い。県や自治体の名前を入れ替えれば済むような設立趣旨がほとんどで、こちらのように真っ直ぐな目的を持っていらっしゃるのはうらやましく思います。

寺沢
確かに、こう言うと語弊があるかもしれないけどテーマが一つに絞られている。例えば、平和博物館ってありますよね。平和はとても大事なことだけど、すごく間口が広くてなかなか絞りきれない。その点うちは満蒙開拓のことだけなので、訴えかけやすいしテーマを絞りやすい。

川延
もう一つお聞きしたかったのが、こちらのボランティアの方たち、今日も大勢いらっしゃって、そのモチベーションはどういうところからくるのでしょうか。

次世代の語り部を育てる必要

寺沢
実はそんなに数は多くもないです。正直言ってこんな田舎ですので、ボランティアを集めるのにも大変苦労します。これが都市部だと、例えば、愛知の「ピースあいち」とか、あそこは名古屋だから元学校の先生やリタイアされた方、大学の教授だった方、いろいろな方々がいらっしゃって、100人ぐらいボランティアの方が活動しているそうです。こちらはこの近辺の飯田にも4年制の大学はなく、女子短大が一つあるだけ。なかなかボランティアを集めにくいところです。
開館する前の年から、語り部が高齢化する中で次世代の語り部を育てる必要がある、それには若い人たちに学んでもらわないといけないということを思った。きっかけの一つは開館するずっと以前に広島、長崎に行ったら、その当時から高校生たちがガイドをやっていた。若い人たちに歴史を知ってもらう意味も含めて次世代の語り部を育てないといけない。もう一つは開館何年か前に舞鶴の引揚記念公園に行ったら、そこで市民ボランティアの方々が半年間ぐらいのコースでボランティア養成講座をやっていると交流する中でお聞きして、それをぜひやりたいと私たちも開館1年前から毎月やってきています。その積み重ねのボランティア養成講座で今は50人ぐらい登録しています。実働は20人ぐらいで、土日を中心に実質は10人ぐらい。

島崎
そうですね。10人ぐらいで、ガイドができる人は4、5人。土日に来られる人、平日に来られる人がばらばらなので。

ボランティアの方々がいらっしゃるおかげで回っている

寺沢
数は正直多くないです。でも幸いなことに熱心な方が多い。本当にありがたいことだなと思うのは、満蒙開拓という切り口、テーマを入口として平和について考える、それを自分自身のライフスタイルとして、ほとんど毎日のように来てくれる元学校の先生や元役場の職員の方がいます。私たち役員にしても、私は本業がありますので記念館には常時来られるわけじゃないし、職員も土日だと2人しかいない。ボランティアの方々がいらっしゃるおかげで回っている。記念館はガイドが付かなくても見てわかるような仕

上げ、立て付けにはなっていますが、ボランティアの方々が言葉を交わして来館者の方と接したほうがインパクトというか思いが高まるのは間違いないです。

声をかけられることが嫌な方には上手に接触して少しでも言葉を交わします。あるいは、逆に「語りたい」という方もおられるので、ガイドする側に回らなくても、向こうが語っていただけることをお聞きする傾聴ボランティア的なことも含めて、いろいろな立場での役割があると思います。ボランティアの方がこの記念館で大きなウエイトを占めるのは間違いない。今年もボランティア養成講座を毎月やっていますが、その中から1年に1人でも2人でも残ってくれればまた次の発展につながると思い地道な活動をしています。なかなか大変ですけれども。

小林
ボランティアの方が求めておられるものは人それぞれかと思いますが、何を求めてここで活動されている印象を受けますか。

寺沢
それぞれだと思う。私たちも報酬をお支払いするわけじゃないので、ここに来てもらって何を持ち帰ってもらえるのか、そこら辺を聞いてみましょう。記念館でボランティアガイドの主力をやっている木村さんです。

木村佳稔
木村と申します。お世話になります。

寺沢
今日は奥さんはみえていないけど、実はご夫婦でよく土日に来てやってもらっています。

小林
いろいろお話をお聞きしたいのですが、ここに来られることに求めているものは何なのかをお聞きしていたところです。

事実を知った驚き

木村
満蒙開拓という言葉すら知らなかった。なぜ始めたか。私は記念館ができるまで求めているもの。満蒙開拓という言葉すら知らなかった。事実も知らなかった。子どもの頃から引揚者という言葉は知っていましたが、それはシベリア抑留だった。だから、岸壁の母の舞鶴というイメージしかなかった。記念館ができる 1年前、次世代の語り部養成講座で館長の寺沢さんが地域の人を集めて1年間満蒙開拓の勉強会を月に1回始めたのです。それにまたまうちの妻が行って、家に帰ってきて「こんな話を聞いた」と教えてくれた。「へえ。そんなひどいことが」という感じでした。その事実を知った驚き。1年間のシリーズの中に2回フィールドワークがありました。戦後の再入植地、それから満蒙開拓の推進に積極的でなかったために圧力がかかって分校をやめさせられちゃった地域。そういったところに行かせてもらった。私は館長と同じ松川町に住んでいますが、館長の住んでいるところは戦後の再入植地で非常に成功したところですけれど、そんなことも地元では知られていない。自分の友だちにもそこに再入植で入った人がいた。

きっと僕は満州に渡ったと思う

その話を聞いた頃、うちの子どもたちは中学 2年生と高校 1年生だった。男の子で、満蒙開拓青少年義勇軍に行く年齢だと思った。実は、僕は今から20年前に横浜から家族で松川にIターンで来ました。その当時生きていたら、きっと僕は満州に渡ったと思うのです。二つ理由があって、一つは20町歩の豊かな生活。男二人いても20町歩あればなんとかなるだろうという欲。もう一つは「満州に行ったら徴兵されないと聞いていた」ってみんな言います。我が家は男三人だから徴兵されないのは非常にメリット。戦争に行かないから殺されなくて済む。そして殺さなくて済む。これが大きかったです。戦争に行ったら自分を守るためには撃つ。それを自分も息子もしなくて済む。満州に行くのがお国のためになると言われれば、悪い要素が何もないとすっかり僕は信じたと思うのです。

自分の子どもたちにそうなってほしくない
話を聞けば聞くほどやっぱりそうしただろうなと、この方と同じように思っただろうなと。さらに話を伺っていくと、それに抗った人たちもいる。でも僕は当時そう思わなかったと思う。時代が変わって、もしそこに僕がタイムスリップしていたら大変なことになったわけで、自分の子どもたちにそうなってほしくない。そう思ってから始めました。館長の講演も15回ぐらい聞いています。あちこち追っかけのように今も年に何回か聞かせていただいています。そんなこと始めて、今6年目ぐらいですかね。

現在進行系の話

僕の中では他人事でも80年前の話でもないです。現在進行系の話。国策によって翻弄されている人は今もいるじゃないですか。福島、広島、長崎であれだけの被害があったけれども日本は原子力行政に舵を切った。それを追認してきたじゃないですか。日本の国民の一人としてその責任をどうするか。僕はここに来て勉強して、みなさんに満蒙開拓の僕も全く知らなかったこういった事実を知ってもらう。その後、こうしてくださいというのではなく、その方々になぜこうなったのか、これからどうすればいいのかを考えていただけるきっかけを伝えるお手伝いができれば、こんなにうれしいことはない。

小林
今を考えるためですよね。

木村
そうです。聞けば聞くほど自分の生活とかぶるし、うちの親ともかぶってくるところがある。うちの親は大陸に行った開拓者ではなかったですけれど、当時を生きてきた人たちのことがよくわかります。

同じ構造の繰り返し

寺沢
福島の原発の話は本当に国策に翻弄されたという意味で満蒙開拓と共通したところがある。満蒙開拓から帰ってきても行く場所がないから、長野から福島とか、県外に出て行った。岩手県に行った人もいっぱいいるし、富士山麓の上九一色村にも。その中でたまたま私の知っている人が福島県葛尾村に行っています。同じ水曲柳開拓団ではないですが、自由開拓団にいた方が帰ってきて福島に再入植しましたが、そこからもまた原発によって出されてしまう。また村を追われてしまう。あれは同じ構造の繰り返し。そう思うとさっきからの話のように昔のことでありながらも現代に共通している。

自分事で考えられる動機づけ

なぜそういうことが起きるのか、我々はどう対処したらいいのか、何をどう変えたらそういうことが起きずに済むのか、考えるヒントが歴史の中に埋まっていると思います。他人事ではなくて自分事、自分だったらどうだろうか、自分がもしその場にいたらどうしていたか、自分事で考えられる動機づけをする場所が記念館なのかなという気がする。こういったボランティアの方々は本当に心強い。ありがたいです。

小林
本当に近すぎて、当事者すぎてつらい人は、場合によっては少し距離感があるところからスタートして考えるのも一つの選択肢かもしれないですね。

寺沢
確かに当事者じゃなくても、その場、その時に自分だったらどうなのかを常に考える。その題材が何かあるということは大きなことだと思います。

小林
福島県内で震災の事業をしても本当に参加者が少ないです。私たちの広報力不足ですけれど、毎年3月11日を挟んで行っている展示も来てくださる方はそう多くはない。震災のイベントをしても、すごく関心を持って考えなければと思っている人たちの層は来てくださいますが、そこから広げていくのがすごく難しく、大きな壁があるような気がしています。そこを突破し踏み越えるためにはどうしたらいいのか。

一人の開拓団員を知ることがすごく大事

木村
満蒙開拓では27万人が渡って、最終的に8万人、約3分の1が犠牲になった。長野県内では約半数が犠牲になっている。そういう大きな数字も大事だけれど、その中の一人の開拓団員を知ることがすごく大事だと僕は思っています。その方がすべてではないけれど、一本の線が通る。語り部さんの送迎もさせていただいています。語り部さんが記念館で話すのは1時間半から2時間ぐらいですが、往復のウォーミングアップとクールダウンの時間をご一緒させていただける。そうすると、ここでは話せないような話、思いがけないことを聞いたりする。その時間がすごく貴重な経験。27万人、8万人それも大事だけれども、一人のことを知ることで、いろいろくついてくるのです。全貌を伝えるのも大事ですが、ここで人気があるのは証言者のコーナーです。すごいダイジェスト版になっていますが、それでも、その人の当時のことをぐっと知ることができる。「あの人はこう言っていたね」というのがどこかにあると次につながるというか、そんな感じがしています。福島の場合、全体が非常に大きくて現在進行系なので難しいところもあると思います。

小林
人の顔が見えてリアルになってくるということでしょうか。

川延
ボランティアのみなさん同士の交流はありますか。

木村
毎月第3木曜日の夜7時から定期ミーティングがあります。冬の間はボランティア養成講座を5回シリーズでやる。年に何回か講演会があるので、その後に講師の方と一緒に懇親会があります。多くのボランティアが来て交流します。うちの弱い部分の一つはみんな仕事を持っている。僕は自称土日要員で土日に来ます。平日はサラリーマンです。交代勤務の方で平日団体さんが多い時を狙って休みをとって来てくれる人もいます。そういう人とは同じ町内に住んでいてもあまり接点がなくて講演会で会える。来ていただいてわかるように交通の便が非常に悪いところなので、車がないと来られない。ご高齢になってくると、高齢者の運転の問題ですけど、ご家族が心配されて「夜の集まりをやめてくれよ」みたいな話も出てきています。月に 1回ボランティア通信を発行しています。後で一部持ってきます。それで情報を共有して「こんな本を読んだよ」、「こんな講演会に行ったよ」という発信をする。来月のお知らせや、「この日、記念館がSOS。応援に来てね」みたいなお願い、そういう情報共有をしています。

小林
通信を作る、「送迎は私たちがやります」みたいな動きは、どういうふうに生まれたり形になったりしているのですか。

木村
通信はうちの妻がボランティアの代表、連絡係でやっています。書くのが好きだったので手探りで始めた。最初はA4裏表だったのが今は3ページ、ボリュームが増えてきています。語り部さんの送迎は運転できればいいというだけでもない。やっぱり本番も大事だけど前後が非常に大切です。というのは本当にとてもつらい話をされるので、映画を見に行くのに一緒に行くのとはわけが違う。多分僕らの成長を見て、記念館のスタッフも「この人ならいいかな」と。語り部さんとの関係もあるので、普段から会っている人や何度かご一緒させていただいている方だと安心して任せられる。

語り部の方がいなくなっていく

寺沢
語り部、体験者が今は10人ぐらいに減っちゃったのです。広島でも長崎でもひめゆりでも同じだけど、語り部の方がいなくなっていく。これからの私たちみたいな施設は、そういった語り部の方の生の声をたくさん聞いておいて、聞いたことをどう伝えていくか、今はそういった時期になっている。今の話のように語り部の方と語りの時間だけじゃなくて接してくれるのは大きな財産になっていくと思います。どこも平和記念館みたいなところはみんな同じ。

木村
高校生ボランティアが来ましたね。あの年代ですか青少年義勇軍に行くのは。

小林
彼らもそう自覚しているのでしょうね。

まず知っていただくところから

木村
そうですね。今日聞いたかどうかわからないですけど、彼らが来館者の方に「当時あなたが先生だったら、どの子を出しますか」という質問をする。ドキッと来ます。割当表があるのですよ。うちの息子の行った中学校は7人出ている。「誰に決める?」と言ったら、「農家の次男、三男、あそこの家は貧しいな」、そうやって結局は決めていった。そんなことを考えたら、「繰り返しちゃいけない」というためには、まず知っていただくところからと思います。

川延
間口が広いテーマなのでしょうね。今日的な課題も含めて、みなさんが我が事として捉えられる、そういう館になってきているのかもしれないですね。

もう一歩踏み込んで

木村
そんな気はします。ただ単に「昔、大変なことがあった」という感想でもまずはいいです。でも、その次に「じゃあ」ともう一歩踏み込んでもらい、自分だったらどうか、自分が開拓民だったら、送り出した側だったら、軍として向こうにいたら、逆に中国の人の立場になって「なぜうちの土地を取られちゃうの?」と考える。その辺すごくストレートなのは子どもたちです。「満蒙開拓とは言っても、実は開拓でないところが多かった。現地の土地を取り上げた」なんて話をすると、「ずるいじゃん」とか言ってね。子どもは率直。その感覚をちゃんと言ったり聞いたりできる人でありたいと思います。

川延
図書を見ておられる方はお近くの方ですか。

寺沢
はい。地元の開拓団で親が行ったと言っていたかな。

川延
ああいう方がここに本を見に来られているということがすごいと思います。

寺沢
足(便)の悪い方も、ここが出来たもので、若い衆に「あそこに連れて行ってくれよ」と言っていらっしゃる。

島崎
逆に子どもさんが「行ってみない?」と連れてきてあげることもあります。

木村
そうすると、「じいちゃんからそんなこと初めて聞いたよ」という話をとうとうと始められたりする。当時の記憶が蘇ってくる。涙で話せない人もいるし、逆に「こうだった」ということを僕らに、ご家族に向けて話てくれて、「初めて聞いたよ」というのは結構あります。

小林
封印していたのですね。

木村
そう、そうです。

ここでしか学べない、知ることができない

岡村
聞いていて思ったのは、この場所ということに実はすごい意味がある。地域の歴史と結びついている。そして、今まで語られていないということは、逆に言うとここでしか学べない、知ることができない。ミッションも非常に大きいですよね。それがうまくかみ合って、この記念館の意味をちゃんと作っていると思いました。さっきも寺沢さんがおっしゃっていたけど、平和ミュージアムはいろいろあるけど、テーマが多岐にわたるので、なぜこの場所なのということが見出しにくく、ここで何を見せるかということが曖昧になりやすい。ここははっきりと見せるものがあって、だからこそ「平和を」という抽象的な問題を考えるための力が生まれてきている。それが僕は今日の大きな発見でした。

寺沢
丸木さんのところも決して立地はいいわけじゃない。でも、テーマというか、丸木夫妻の思い、原爆に対する思いがある。

岡村
ボランティアの人たちが都市部に比べると集まりにくい問題などは一緒だと思った。うちはまだ東京に近いので、地元の人よりも東京から来るボランティアの方が多いです。

寺沢
やはりそうですか。

岡村
テーマに共鳴する人が集まる場所の宿命かなと思ったりします。

寺沢
来館者の時期的な集中、偏りはありますか。修学旅行が多い時期とか。

岡村
それはすごくあります。圧倒的に8月です。ボランティアの人がここ5年の入館者分析をやってくれました。上位に来る企画展はみな夏に開催したもの。期間によって違うから1日平均で出しますが、上位ずらりと夏の企画が並んだ。一位が石川真生さん。あれだけは冬にやったにも関わらず。下位、ワーストランキングはこの冬の時期です。12月とか1月辺り。

寺沢
やっぱりそうですか。お聞きしたいのですが、うちの記念館は場所が信州なだけに、季節によって隔たりがあります。ピークの時期は秋の観光シーズン、紅葉シーズン、りんご狩りのシーズン。1月、2月はこの時期の3分の1、4分の1に来館者が減っちゃうのです。そうすると人の、運営の問題になるのですが、人の手当てが年間を通じて同じようになかなかできない。それはなかなか厳しいです。丸木美術館には今何名ぐらい常時スタッフはいらっしゃるのですか。

岡村
常勤職員は3人です。

寺沢
ボランティアの方もいらっしゃいますか。

岡村
そうですね。アルバイト、ボランティア、最近働き方改革で職員の休みを増やそう、残業を減らそうとしています。今まで職員は常勤最低必ず2人を守っていたのですけど、1人の時期もOKにして、その分地域の方にアルバイト、ボランティアで入ってもらうことにしているので、今はほぼ毎日ぐらい来ています。それとは別にイベントの時も。

寺沢
その時はその時で。

岡村
展示替え、ニュース発送作業にもボランティアが来ます。

寺沢
そういった方々がいないとやっていけないのが実情だよね。

岡村
それはやっぱり自前で回していく施設の宿命です。

川延
解説は高校生がやってくれましたが、その他にボランティアの方はどの程度館全体のお仕事に関わっていらっしゃるのですか。

木村
ピースラボというボランティアグループの登録数では50数名いますが、遠方の方もいて、実際に動けているのが今は20名ぐらいです。その中で団体さんを含め案内をしているのが5、6人。

岡村
草刈りもやっていますか。

木村
草刈りが夏、5月から9月いっぱいぐらいまでは大事な仕事です。

岡村
めちゃくちゃ大変ですよね。

木村
そうです。自分の家をやった後に記念館に必ず来てくれる70代の女性の方もおられる。夏は暑いので、記念館が開く9時よりもうんと早く、涼しい時間に草だけ刈って帰る人とか、いろいろです。あとは資料の整理、講演会の記録テープを書き起こす、そういったのですと長野市、京都のボランティアの方が受けてくださっている。距離は関係なくデータを送ってということもできるので。

小林
みなさんそれぞれのやりやすいやり方で。

木村
はい。得意分野を生かして。

島崎
そうですね。自分のやれることをやる。

岡村
今、うちもそうです。館に来なくてもできるボランティアを増やしていこうと。いろいろな形で力になってくれるやり方を。

農業班がありまして

島崎
農業班がありまして、中国のコウリャンを駐車場に植えて、夏にはコウリャン粥で食べてみようとしています。

小林
お振る舞いをするのですか。

島崎
全員ではないですけど希望者に。農業を専門にボランティアでやってくれている方もいる。

小林
そういうのはみなさんから、「こんなことをやってみようか」と出てくるのですか。

木村
そうですね。「記念館で植えてみよう」と植えたら、最初の年は4mを超えるような高さになった。すると「あれは何」、「コウリャンです」と撮影スポットになった。

川延
食べてみたい。

木村
穂先を展示にも使っています。それを見てとうとうと話を始める方もいらした。何もないと話のきっかけがないので、展示だけでもいいですが、そういうプラスアルファがあるとまた違った広がりが出てくる感じですね。

岡村
満州と言うとコウリャンだけど見たことない。

木村
そうですよね。「コウリャン粥よりも持ってきてもらった漬物、これがおいしいね」「当時は多分これなしで食べたのだね」といろいろな話が広がる。

川延
自己実現の場ですね。

寺沢
そうですね。それはみなさん思うのでしょう。ここのテー

マを通じて何かそれぞれ自分のしたいこと、すべきこと、そういうものを見出してやってくれている、多分それがうまく機能して回っているのだと思います。

ボランティアは自分のため

島崎
「ボランティアは自分のため」と言っていました。

小林
名言ですね。ここはそうありえている。

岡村
平和博物館のネットワークにみなさん大人数で参加してくれていますよね。

寺沢
もっと本当は職員、スタッフも参加させたいけど、ちょうど10月頃の開催が多いじゃないですか。

木村
いつも繁忙期です。

寺沢
うちの一番の忙しい時期なので、私が休みのときは「代わりに行ってよ」と言いますが、なかなかそうもいかない。

岡村
平和博物館ネットワーク、来年はどこになりますか。

島崎
来年は京都、再来年はここが会場になりそうで、時期をちょっとずらしてもらっています。繁忙期はきつい。こんな立地だから交通の便とか考えないと。

岡村
立派なセミナールームもあるし。

寺沢
遠いということと公共交通機関がないから、自分の車かタクシーを使って費用がかかっちゃう。宿泊も近くに昼神温泉があるけど高いです。学生が長期ここに来て通って勉強したい場合に温泉に何泊もできないし、飯田市のビジネスホテルに泊まって通おうにも車がないと不便、そういった悩みはいっぱいあります。そういったことをどう解決していくか。

岡村
そこを行政がサポートするという話はないですか。

寺沢
ないですね。

岡村
うちもないですけど。

木村
民泊、ゲストハウス、そういうところと提携してみたい。

岡村
運営費は出さなくてもいいから、周辺をサポートしてくれるといいですけど。

寺沢
そう思うのですけど、行政も考え方が一つではなく内部にいろいろな捉え方がある。一生懸命支援してやろうという方もいれば、そうでない方もいらっしゃる。でも、ありがたいのは地域で記念館を活用しようという動きがある。例えば、飯田市は学校でここに来る場合は入館料を全部市で持ってくれる。そういったことにもだんだんなってきてはいますが、まだまだこれから。

川延
こちらの館を知った時に最初に思ったのは、満蒙開拓は長野が突出して多いですけれど、各県に事例があまねくある。北海道が少なかったと思いましたが、福島も戦後に戻って来られて開拓という葛尾の方のような例がある。それを知ってもその先の情報を得るためにどうしていいかわからなかったので、こちらの活動によって各地ですごく助かっていらっしゃると思います。

寺沢
本当に各県でも満蒙開拓のことはあまり記録が残っていないです。ほとんど組織は残っていないし、各県の「開拓史」は作っているところと作っていないところがある。満蒙開拓のことを知りたいと思って他県の県庁を尋ねてもたらい回しにされる。管轄する部署もない。なぜ北海道に開拓団が少ないかと言うとあそこは元々が開拓地だから。それでも同じ寒冷地農法を指導する立場としてやっぱり送り込まれています。

川延
僕らも全然知りませんでした。知ったのは原発事故の問題で飯舘村の方からお話を聞いている時、「実はうちのおじいさんは満州から戻ってきた」、「石だらけのところしか与えられなくて、庭にゴロゴロしている石は全部掘り出したもの」というお話を聞いた。それで初めて知ったような感じです。

寺沢
福島県も戦後開拓の受け入れが多かったと思います。もともと分けてもらえる農地がなくて渡った方が多いわけですから、帰ってきても行く場所がない。そこで結局山間地に入らざるを得なかった。だから福島とか岩手に、この辺りからも岩手県にごっそり分村みたいな形で満州から帰ってきて行った方々がいる。満蒙開拓は残留孤児、戦後開拓といろいろ広がって現代までつながっているテーマだとあらためて思います。

川延
満蒙開拓の歴史が自分たちの地域にもあったというのを知ると同時に、それが他にもたくさんあるというのを知ると連帯感も持ちます。なかったほうが良かった歴史ですけど。

寺沢
はい。あります。私も仕事で県外に行くと必ずその地域の戦後開拓地を訪ねます。やっぱり一つの共通項があると思うので、満蒙開拓を切り口に地域を超えての連携、記念館、施設のコミュニケーション、何かそういった広がりができるといいなと本当に思います。

岡村
それはこういう場所があるからこそ。

寺沢
拠点があるというのは大事です。

島崎
なければこういう出会いもなかった。

小林
どうもありがとうございました。

寄稿

ミュージアムのディープユーザー

原爆の図丸木美術館学芸員・専門理事　岡村幸宣

「ミュージアムのディープユーザー」というテーマで行った、ライフミュージアムネットワークの大阪・長野リサーチ。

初日は大阪の長居公園にある大阪市立自然史博物館へ。敗戦から5年後の1950年（丸木位里・赤松俊子が最初の「原爆の図」を描いた年でもあります）という早い時期に開館した歴史ある博物館です。午前中、地域に根ざした展示を見てまわりながら、館内に陳列された「ホネ」――骨格標本の異様な多さが気になっていました。今回の目的は、"日本最大の標本作製サークル"と呼ばれる、「なにわホネホネ団」の話を聴くことだったのです。

午後、団長の西澤さんにバックヤードへ案内していただくと、ちょうど若い団員がホネを洗っているところでした。各地から送られてくる動物の死骸を解体し、骨格標本の資料とすることを主な活動としている「なにわホネホネ団」。2003年結成の時点で哺乳類500点／鳥類3000点程度だった同館の骨格標本は、10年後には哺乳類3000点／鳥類7000点を超え、現在も増え続けているというのだから驚きです。登録メンバーは現在約400人、入団に年齢制限はなく、小学生も参加しているとのこと。「タヌキ1匹を一人で皮むき」できることが入団の目安だそうです。資料整理はミュージアムの基本。とはいえ、サークル活動でこんなふうにミュージアムを開いていくことができるんだ！というのは、とても新鮮な発見でした。

西澤団長と学芸員の和田さんにも、じっくりお話を伺いました。自由かつ自主的な活動が行われる背景には、戦後の大阪において、市民の主導で博物館が作られていった（当初は大阪市立美術館の廊下からはじまったそうです）という歴史が影響しているようですし、「なにわホネホネ団」結成のキーパーソンである西澤さんの突出した個性も推進力・求心力になっているのでしょう。意外にも彼女は千葉県出身だそうですが、変化を生み出す存在は、やはり外の世界からやって来るのかもしれません。

そして「なにわホネホネ団」は、東日本大震災後に東北での支援ワークショップも継続的に行っています。その名も「東北遠征団」。こうした活動もまた、西澤さんが現地に飛び、被災した地域の博物館や子どもたちを楽しいイベントで応援したい、と発案したことからはじまっています。「物事を起こしてくれる暴れ馬のような人」と評する和田さんに対し、「やりたいことを相談して、止められたことがない」と笑う西澤さん。結局、ミュージアムを生かすのは「人」なのだと、あらためて感じました。

翌日は、長野県下伊那郡阿智村にある満蒙開拓平和記念館へ。2013年の開館以前から寺沢館長はじめボランティア団体「ピースＬａｂｏ.」の木村さんらスタッフの方々とは何度もお会いしてお話を聞いていましたが、実際に記念館を訪れるのは初めてです。ライフミュージアムネットワークのおかげで、とても良い機会をいただきました。

館内で展示を観ていると、高校生グループが展示説明のボランティアをしていたのです。若い世代が地域の歴史を学び、人に伝えようという取り組みは、この記念館がなぜ、なんのためにできたのか、地域でどのような役割を果たしているのかが伝わってくるようで、心に残りました。

展示を観たあとは、寺沢館長、木村さん、事務局の島崎さんに詳しくお話を伺いました。長野県南部の飯田・下伊那地方は、「満蒙開拓」に全国でもっとも多くの人を送り出した地域。また、戦時中に数多くの中国人を強制連行して労働させた平岡ダムもあります。そうした歴史性を背負っているため、戦後は中国人労働者の遺骨収集や、中国残留日本人孤児の帰国支援運動が行われていました。「満蒙開拓」は、日本にとって必ずしも都合の良い記憶だけではありません。これまで「満蒙開拓」に特化した記念館が全国のどこにもなかったというのは、そんな複雑な事情もあったのでしょう。しかし、深い記憶を抱えた土地であったからこそ、地元の人びとが「平和」のための記念館の設立に尽力したという話を聞き、「場」の持つ意味を痛感しました。そして、「満蒙開拓」から引き揚げてきた人は、郷里に戻らず再び国内外へ散らばり、そのなかには福島へ行った人もいた、という話を聞いて、ライフミュージアムネットワークという新たな「場」のつながりの意味も考えました。

寺沢館長がおっしゃっていた「この場があり、拠点となることで、動いていくことがある」という言葉は、同じミュージアムにかかわる者として、抱え続けていきたいと思っています。